

前編「つむる」



はあ……。

夕食中、思わずため息がもれてしまい、自分でもびっくりする。日曜日しか一緒にとれない夕食の時間を楽しく過ごせたら、そう思っても自分から会話が續かない。

「パパ～、クイズですよ～」と、娘の突然の言葉に救われる。

「お、どんなクイズ？ 楽しみ」

「このまえ、パパが、めをつむったのは、いつでしょうか？」
子どものひっかけ問題だから“まばたき”しているからとかの理由で、きっと“いま”が正解なんだろう。しかし、いきなり正解してしまってもつまらない。

「う～ん、難しいなあ……」と言いながらも、どう間違えるか頭を回転させてみる。

「答えは、朝。起きる時まで、めをつむってたから」と、めをパチパチさせて答えてみる。

「ブーーーーッ！」と、娘の嬉しそうな顔。

「え～～～っ」と、不服そうにする私。

「こたえは、いま、でした～！！」

気がつく、リビングは私一人だった。

娘とお風呂に入る約束をしていたのに、食後の食器洗いをやろうと思っていたのに、娘を寝かしつけた後には夫婦の会話かと思っていたのに……、時計の針は真上を指しており、また新しい週が始まってしまっていた。

顧客のために、後輩のために、会社のために。経験を重ねるにつれて視野も広がり、もっとこうすれば良くなるはずと信じて働いているつもりだが、この数年は目に見えた成果も出ていない。やりたいことよりも、やらなければならない ToDoリストだけがが増えていく。いろんなことが目につき、良かれと思ってやったことが裏目に出てしまう……、そんな1週間がリピートされるのが憂鬱だった。

真夜中のコーヒーも、中年になった自分の姿も、悲劇のヒロインみたいだ。

これからの自分の人生は？ 会社の行く末は？ 家族の生活は？ 未来は？ 答えのない漠然とした問いばかりが生まれては消えていく。

こんどは「ママ～、ママがいい～」と、顔をくちゃくちゃにして泣く娘の姿が浮かんできた。ちょっとしたことなのに、声を荒げて怒ってしまった今朝の自分を責める。次々に、どうしようもないことばかりが浮かんで消えていく。誰も助けに来てくれるわけではないのに、自分は誰かを、何かを、待っているのだろうか？

「めをつむったのは、いつでしょうか？」

こんな夜中に起きているはずはないと思いながらも、部屋を見渡す。気のせいだったが、ワラをもつかむ気持ちで、まぶたをとじてみた。

ふうふう……。

ゆっくり息を吐き出し呼吸に集中しながら、変えられない過去も、手の届かない未来も、許せない自分も、うまくいかない他者との関係も、あたたかい闇と光がまざったやさしい景色の中に溶けていくようだ。トゲトゲした心がまあるくなっていくのがわかる。いろんなことも、自分のことも、やさしくつつみこんで受け入れられる気がする。

そうか！ ほんとうに答えは“いま”だったんだ。

いま、めをつむれば、よかったんだ。

めをつむることは、日々を生きていくこと。

父としても夫としても、人間としても未熟な私に、娘の元気な声がいまわたり、あたたかいものが頬をつたう。

「こたえは、いま、でした～！！」

【後編「つながる」に続く】

※この物語はフィクションです。



文：小西 秀和（こにしひでかず）

1979年神戸生まれ。

2002年静岡大学人文学部卒。

在学中から表現活動や企画等にかかわる。

現在、社会福祉法人西陣会（京都市）勤務。

後編「つながる」

めずらしく夜中に目を覚ます。

リビングに行くと、めをつむったまま涙を流しているかと思えば、こんどは微笑んで……こんな深夜に何やってんのと呆れながら、再び布団にもどることにした。

はあ……。

やっぱり、起きてこない。予想はしてたけど。朝食、洗濯、娘の送り出しを同時並行にこなしながら、ひと息つく間もなく仕事に向かう。

あたりまえのことだけど、仕事中は仕事にだけ集中すればいい。娘や旦那のような不確定要素のかたまりの家庭よりも、仕事の方がいくらか自分のペースで進めることができるし、いろんなことも割り切れる。

そんな仕事もタイムリミット。夕食のメニューを考えなければ。野菜は高いけど栄養のバランスも必要だし、娘の昼ごはんのメニューは何だったかな、今日の特売品は……いろんな条件をクリアして買い物をすまし、自転車にまたがる。今週も始まったばかり、まいにちを乗り越えていくのが精一杯だけど、がんばれわたし！ と重いペダルをふみこんだ。

いつもの商店街を疾走していると、視界の片隅になにかが飛びこんできた。足はペダルをこいだまま、頭がわたしを呼び止める。

ん？ つむる？ 写真？

意識が追いついて、足がようやくとまり、ちょっとだけならと、来た道を引き返す。

あっ！！！！？ 息がとまる。

おびたしい数のモノクロ写真が……しかも、全員がああの表情で。なにこれ？ わたしが知らないだけで、流行ってるの？ もしかして、あの人も写ってるんだろうか……。すうーっと、深く息を吸い込んでから、いちまい一枚、目をうつす。

ひとり、ひとり、

おなじ、ちがう、ちがう、おなじ、おなじ……

あのひと、わたしの、まぶたが、かさなる。

どうして？ この写真から目が離せないんだろう。

ずっと見ていたいけど、タイムオーバー。もう帰らないと。

わたしは自転車とおなじ。

朝起きて、朝食、洗濯、準備、仕事、買い物、夕食、片付け、入浴、就寝……ゆっくりなんてしてられない。立ち止まれば、次に進めなくなってしまう。

力をふりしぼって外を見る。思いっきりペダルをこいだ。

「そういえば、ママ、おみくじひいたんだよ」

二人だけのいつもの食事が終わってから、写真展にあったおみくじのことを思い出す。

「ママだけいいな、いいな～。はつもうで？」

「初詣みたいに、みんなめをつむってたんだよ」

「へんなの。おみくじみせて～」

膝の上で、はやく早くとせかす娘が、まだあけていないおみくじのテープをはがす。

「なんてかいてあるの～？？」

きょうは、なんかい息がとまるんだろう。

「ね～ね～、ママ～」

「……」

ぎゅうっと、か細い腕に抱きしめてもらうのは初めてかもしれないな。

ふいに、あの写真がまぶたの奥に浮かぶ。

一人でペダルをこぎ続けなくても大丈夫、立ち止まっても大丈夫、あしたも大丈夫。

あのひとも、わたしとおなじ、ひとりじゃない。

めをつむりながら、あたたかさにつつまれていくのがわかった。

「おみくじにはねえ、“大切な人の前でめをつむると大吉”って書いてあるんだよ」

※この物語はフィクションです。



文：小西 秀和(こにしひでかず)

1979年神戸生まれ。

2002年静岡大学人文学部卒。

在学中から表現活動や企画等にかかわる。

現在、社会福祉法人西陣会(京都市)勤務。